

## <エッセイ>日文研創立三〇周年おめでとう！

著者	陸 留弟
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	176-180
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006716">http://doi.org/10.15055/00006716</a>

## <エッセイ>日文研創立三〇周年おめでとう！

著者	陸 留弟
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	176-180
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006716">http://doi.org/10.15055/00006716</a>

## 日文研創立三〇周年おめでとう！

陸 留 弟

この度、国際日本文化研究センターが創立三〇周年を迎えました。かつて同センターで研究活動をした者として、衷心よりお祝いのことをお慶び申し上げます。本当におめでとうございませぬ。

日文研との付き合いは、一九九〇年代に遡る事ができます。最初は一九九四年国際シンポジウムで、ノーベル文学賞の受賞者である大江健三郎先生の講演を聞くために足を運びました。

当時、同シンポジウムは多数の参加者があり、大変盛況でした。

本会場では、数多くの研究者が集まり、基調講演をはじめ、数々の貴重な研究成果が発表され、聴衆が終始熱心に聞き入っていました。本会場のみならず、各分科会でも学術的な反論を含めて活発な討論を展開したり、参加者から発表者に熱心な質問が投げかけられたりする場面も多く見られ、熱気に溢れていました。日本人の研究発表ばかりでなく、外国人の研究発表も少なくありません。「日本語教育研究」分科会では、北京大学の孫宗光氏の発表した研究成果も、また王家驊氏の「日本の儒家と儒教思想の現状」に関する発言もとても示唆的で、勉強になりました。質疑応答では双方から活発に発言がなされ、予定時間を超えるほど充実した意見交換が行われました。

さらに、庭沿いの廊下に設けられた展示コーナーでは、同シンポジウムの参加者の皆様はポ

スターなどを通じて、日文研の概要やその研究内容を真剣に見学されました。このような学术交流と研究に関する展示は一面から日文研の活動においても効果的な広報活動の場となりました。

日文研は、とても閑静とした京都の洛西に位置し、学問の研究活動にふさわしいのです。

数多くの内外の研究者たちは、日頃の研究を重ねられた成果がここで報告され、お互いに議論を通じて、日本研究の諸成果を交換して相互刺激を与えつつ、学問の真理を切磋琢磨に探求し続けています。コーヒープレイクでは、異文化を観察することや理解することなど、研究者の皆様は和やかな雰囲気の中で個々に忌憚のない歓談、親睦を深めました。

世界の日本研究者に研究情報の提供などの研究協力をを行うことを設立趣旨としているのが日文研です。今日、研究者のネットワークづくりを進め、国内外の日本研究者の重要な研究拠点となっています。

このような日本の文化・歴史を研究する新しい豊かな一側面は、日本語教育者の私にとって大きな励みとなりました。一九九四年のシンポジウムがきっかけで、日文研との付き合いが始まりました。

海外の日本研究者への協力・支援制度を受け、外国人研究員として本格的に日文研にお世話になったのは二〇〇六年九月からの一年間でした。

当時「中日茶文化の違いについて」を研究テーマに、日文研の優れた研究者の方々に恵まれ、鈴木貞美先生のご指導を受けながら研究活動をさせていただきました。ある意味で、「茶の湯」と同じように日常の俗世を離れ、ちょうど学問の修行に入ったような研究活動の中で体を通して創造性に富み、進取の精神を会得していくものです。

さらに二〇一三年四〜九月に、日本庭園研究の大家である白幡洋三郎先生のご指導をもとに、「日本の茶庭について」研究するために再び外国人研究者として日文研にやってまいりました。書齋で研究に没頭し、関連文献をリサーチするのみならず、日本海に臨む閑かな金沢のままに散策しました。三大名園の一つ「兼六園」のほか、実際の茶庭の環境と場面における茶人の行動に近づき、茶道思想を解析しようと、金沢「玉泉園」にある裏千家の茶庭「灑雪亭」とその露地などを回って現地調査をしました。

このように、私が日本語教育者として日文研に二回にわたってお世話になったのは、いずれも日本文化の神髄である「茶の湯」との出会いのおかげです。言い換えれば、日文研の先生との出会いは「Manpower」、日本文化との付き合い合は「Tea Power」のおかげでしょう。研究成果として「茶芸と茶道における諸要素―中国茶芸の歴史、文化、習慣、特徴と日本茶道の型・気・美・禅」、「露地考―中国からみた日本の庭園美」、それぞれ拙論をまとめました。まさに日文研の趣旨にふさわしい研究協力を受け、研究情報を発信することができました。ここに改めて日文研に深く感謝致します！本当に恵まれて、とても光栄に思います。

「三〇にして立つ」。日文研は創立三〇周年の節目を迎えます。情報技術革命によって急速に変貌する世界の状況にふさわしい研究所として先端的で独創的な研究を生み出し続けています。今日、日文研が国内外の日本研究者にとって他の追隨を許さない重要な研究拠点となっていることは、専任研究スタッフから事務の職員に至るまで、センターが丸となり、長年に努力し続けた賜物です。もちろんのこと、その中に外国人研究者の研究成果も含まれていることは、われわれ外国人研究者にとってこの上ない喜びでもあります。

「茶の湯」は、ただの飲み物ではなく、日本文化の回帰点にあるものです。このような立派な

文化的回帰点には、茶を入れて飲むことを楽しめるだけでなく、生きていく上での目的・考  
え方、宗教などが含まれています。すなわち人生観、宇宙観のような普遍的真理が存在してい  
ます。

「茶の湯」は日本文化の代表的な存在として、深く他の文化形態にも影響を及ぼしています。  
例えば、日本語の文法と日本人の行動パターンつまり「型」を複眼的に見ますと、「挨拶行為」  
にたどり着いたのです。つまりハイセンスな日本語表現、デリケートな「茶の湯」の作法と日  
本人の日常的な振る舞いを考えますと、この「挨拶」文化が大きな役割を果たしています。  
「挨拶は人より先に分かる方から」始まるという日本文化のすべてが凝縮されているのではあ  
りませんか。

「すみません」、「申し訳ありません」、「お疲れ様でした」、「ご苦労様でした」、「ありがたう  
ございました」、「先に失礼します」、「大変結構でございます」、「今日はいいい天気ですね。ええ、  
いい天気ですね」などなど、日本文化の神髄を物語っています。

「茶の湯」は、「挨拶」という一見簡単そうに聞こえるものを通じて、人類の普遍的なものとし  
て日本文化を発信し続けています。敢えて「茶の湯」を研究した成果はなにかと自問すれ  
ば、おそらくそれは収穫の一つでした。もう一つ、とても深い感銘を覚えているのは「茶気」  
とのことです。

「この茶の茶気は重い」。中国語的な解釈をすれば、茶葉の入れすぎ、濃過ぎとの意味合いで  
す。ですが、「茶気」という単語は日本語になると、使い方も意味合いも違ってきます。例え  
ば「あの男は茶気がない」。つまり、あの男は風雅、俳諧とユーモアのセンスがないというこ  
とになります。（『The Book Of Tea』岡倉覚三より）。いつかの日か、「立派な茶気人」とかの

ような挨拶用語が生まれてくるかもしれません。

今日、二〇〇あまりの国、七〇億を超えた人口という世界では、ほとんどと言えるほど、お茶が世界中で喜ばれているでしょう。例えば、中国浙江省杭州産の龍井茶は、EUに「中国銘茶」と認められています。また日本の宇治茶も世界的なブランド品として好かれていて、パリのレストランで来客招待の一品とされるほど、魅力的です。

茶は、「文明の植物」とさえ称えられています。単なる飲料の範疇を超え、心臓病や癌の防止や脂肪減少などにも効果的であると研究成果に立証されています。さらに「和敬静寂」という茶の理念は人々の精神的な世界に浸透しています。「好い茶、好い水、好い器」の三つの「好」を持って楽しむ中国の茶藝文化、「茶室、茶庭と茶道具」の型を掲げながら、「修身養心」を趣旨とする日本の茶道文化が世界中に広げられつつあるのは、茶の葉から生まれた魅力的な魔法でしょう。

このような魅力的な植物を、根を深く、幹を太く、葉を大きく育てていかなければなりません。そしてまた、いつでも、どこでも、美味しくお茶を飲みましょう。

日文研への感謝の意を持って、またいつの日か、もう一度日文研の研究室で日本茶を点てて「茶の湯」という日本文化を研究する日を想像しながら、中国茶「龍井」を啜り続けています。

(国際日本文化研究センター元外国人研究員)